

「私のイチバンボシ」  
第10話

水瀬真理佳

○テレビ局・廊下

プロデューサー・塚越洋（47）が歩いている。

スマホが鳴り、画面には「大魔王」の表示。

塚越、ため息をついて、

塚越「……もしもし」

宮本の声「（ハイテンションで）塚ちゃん。

忙しいとごめんね。ちょっと頼みたいことあってさ」

塚越、「やっぱりか」という顔。

塚越「このタイミングで宮本さんから頼まれたことって嫌な予感しかしないんですけれど……田中くん、大丈夫なんですか？」

○事務所・会議室

宮本、会議中に通話。

宮本「さすが塚ちゃん。話が早くて助かるよ」  
太田（小声で）塚ちゃんって誰ですか？」

後藤「（小声で）カウントダウンの塚越P。通

称・塚ちゃん」

S N S マーケティング室長・太田、  
「あゝ」と納得。

塚越の声「きつと知らない人の方が少ないですよ。それで、何ですか頼みって。大体予想つきますけど」

宮本「悪だくみの顔」今週のカウントダウンの生放送にさ、ユニクラ入れてもらえないかな？って」

太田、ぎよっとする。

部長・二宮とチーフマネージャー・後藤、  
「いつものやつ」と頷く。

○テレビ局・廊下

塚越、「出たよ」という顔。

塚越「あなたって人は本当に……毎回毎回お願いの域を越えてるんですよ。自覚ありますか？」

宮本の声「（笑いながら）塚ちゃんだから頼んでるんだよ。もちろんタダでは言わない」

塚越、立ち止まる。

塚越「……と言うと？」

宮本の声「ユニクラとルトエーに新曲を披露

させる」

塚越、一瞬フリーズする。

塚越「あの、お願いが一つ増ええてるの気づ

いてます？」

宮本の声「ルトエーは新曲テレビ初公開。ユ

ニクラはまだ情報も出してない、出来立て

ホヤホヤの新曲を宇宙最速初解禁。公式で

も出してないやつを塚ちゃんに捧げさせて

もらうよ。どう？　なかなか盛り上がるだ

ろ？」

塚越、呆れながら笑う。

塚越「(ボソツと)このオツサンほんとどうか

してる」

宮本の声「おい塚ちゃん今オツサンって言

った？　言ったよな？　なんだ反抗期か？」

塚越「(ワクワクしながら)そもそもスケジユ

ール大丈夫なんですか？　ユニクラもルト

「エーも忙しいでしょ？」

○ 事務所・会議室

宮本、口角を上げる。

宮本「塚ちゃんのためならどうにでもするよ」

塚越の声「……分かりました。粹はなんとか

します。でも、期待はしないでくださいよ。

俺も所詮雇われの身なので」

宮本「塚ちゃんはいっだって期待を越えてく

る男だから。いつもありがとな。はいはい、

それじゃあ」

宮本、電話を切る。

宮本「今週ユニクラとルトエー、カウントダ

ウンの枠押さえたから。調整よろしく！」

二宮・後藤「はい！」

太田、小さく拍手。

○ 高校・職員室

電話が鳴り続け、職員が対応に追われている。

教師「申し訳ありませんが、そのようなお問い合わせにはお答えしかねますので」

事務長「ですから、答えられないって言うてるでしょう！」

教頭と担任・谷口、部屋の様子を見る。

教頭「宮本さん呼ぼうか。あと保護者にも連絡して」

谷口「分かりました」

○同・教室

生徒、机と椅子を後ろに下げて掃除中。

雑巾で黒板を拭いているえまの背中。

教室の外から女子二人が入って来る。

女子1「ねえねえ、宮本えまちゃんだよね？」

えま「う、うん」

女子2「これってえまちゃんなの？」

と、例の投稿を見せる。

えま、大きく目を見開く。

えま「ちよっと見てもいい!?」

えま、女子2のスマホでコメントをス

クロール。

女子 1 「これってえまちゃんだよね！ この

隣にいるのって本当にユニクラのはるピ

ー？ なんて知り合いなの？」

えま、真っ青になる。

桃香、教室に戻ってくる。

桃香 「えまぁー聞いてよお……」

桃香、異変に気付いてえまに寄る。

桃香 「なに？ どうしたの？」

女子 2、桃香に例の投稿を見せる。

桃香 「写ってるの誰か知らないけど、これ絶

対勝手に載せてるよね？ しかもこうやっ

て個人を特定するような情報書き込むなん

て頭おかしいんじゃないの!？」

と、声を張る。

女子 1 「私たちに言われても……ね？」

女子 2 「(頷いて) 回って来ただけだし」

谷口 「おい。午前で帰れんだからちゃんと

掃除しろよー」

と、教室に入ってきて来る。

女子2、慌ててスマホを後ろに隠す。

谷口「ほら、スマホは見なかったことにする

から、教室戻れー」

女子1「谷先ありがとう！」

女子2「イケメン！」

と、教室を出ていく。

谷口「ごめん宮本。ちよっといいか？」

えま、コクリと頷く。

桃香「(心配そうに)谷先……！」

谷口「大丈夫だから」

と、えまと歩いて行く。

### ○同・面談室

谷口の声「失礼します」

ノックして谷口とえまが入る。

テーブルを挟んで校長と美香が座って

いる。

美香、立ち上がって、

美香「お騒がせして申し訳ありません」

と、頭を下げる。



谷口「いえいえ。こちらも突然お呼び立てして申し訳ありません」

校長「宮本さんも掃除中にごめんね。とりあえず座って」

えま、美香の隣に座る。  
谷口、校長の隣に座る。

えま「：：SNSのことですよね？」

谷口「知ってたか：：誰かに何か言われたか？」

えま「：：さつきD組の子たちに聞かれました」

谷口「全く、みんな情報キャッチするのが早いな」

えま「きつと学校に電話とかかかかってますよね？」

校長と谷口、顔を見合わせる。  
えま「：：ごめんなさい」

と、頭を下げる。  
谷口「なんで宮本が謝るんだよ。宮本もびつくりしたよな」

校長「さっきお母様にも伝えただけだね。  
今日宮本さんを呼んだのは、作戦会議がし  
たかったんだ」  
えま「作戦会議……？」  
谷口「とりあえず明日全クラスでこういう投  
稿をイタズラに拡散したり、誰なのか特定  
したりしないよう言ってもらおうと思う」  
えま、激しく首を横に振る。  
えま「それだと先生たちに庇ってもらってる  
感じになるし、余計に怪しく見えちゃいま  
す……私のごとは別にいいんです。（涙を  
浮かべて）でも、その写真に写ってる人に  
は、絶対迷惑かけたくないんです……」  
えまの目からポロポロ涙が零れる。  
教頭と谷口、心配そうにする。  
美香、えまにハンカチを渡す。  
校長「分かった。宮本さんがそう言うなら、  
みんなには何も言わない。その代わり、何  
かあったら一人で抱えこまないこと。家の  
人でも、谷口先生でも、友達でも誰でもいい

い。相談しやすい人に必ず相談すること。  
いいかい？」

えま「……はい。ありがとうございます」

えま、膝の上で手を握りしめながら深く頭を下げる。

○同・廊下

えまと美香が部屋を出てくる。

桃香「えま！」

えま、桃香を見て再び涙が浮かぶ。

えま「……桃香あ……」

桃香、えまに駆け寄って抱きしめる。

えま、鼻をすすって泣いている。

桃香「大丈夫、大丈夫」

と、背中をさする。

谷口と美香、二人を見守る。

○道路・車内

美香が運転する車内。

えま、助手席で握りしめた手を見つめ

る。

美香「（明るく）パパがね、『全員覚悟しとけよ』ってカンカンに怒ってた。えまは知らないだろうけど、パパが怒ったら超コワイのよ？」

えま「：：陽斗くんのこととは何か言ってた？」

美香「（首を横に振って）でも大丈夫。こういう時のパパはね、すごく心強いんだから！すぐに収まるからね」

えま「：：うん：：」

えま、俯きながら泣いている。

美香、前を見ながら辛そうな表情。

○宮本家・えまの部屋（夜）

真っ暗な部屋。

えま、SNSを開こうとしてやめる。

メッセージアプリのアイコンにたくさ

んの数字。

桃香や大和、陽斗からのメッセージ。

えま、陽斗からのメッセージを見る。

へ陽斗…俺のせいでごめんへ陽斗…  
全部俺のせいだからへ陽斗…えまは  
何も悪くないからへ  
えま、陽斗に返信。へえま…迷惑かけ  
てごめんなさいへ

○同（朝）

ドアをノックする音。

美香の声「えまー？ 入るよ」

えま、うつすらと目を開ける。

美香「大丈夫？ 学校休む？」

えま、険しい顔で首を横に振る。

美香「…朝ごはんできてるからおいで。今

日はホットケーキ作っちゃった！」

美香、えまの頭を撫でて部屋を出る。

えま、布団を被って体を丸める。

えま M 「…絶対休んじゃダメ」

えま、ゆっくり起き上がる。

○高校・教室（朝）

登校して来た生徒で賑やかな教室。

えま、静かに教室に入って席に着く。

すぐに女子が寄って来る。

女子3 「ねえ、これってえまだよね？」

と、例の投稿を見せる。

えま 「……どうだろ。ちよっとブレてるし……

……

女子4 「隣の人って彼氏？」

女子5 「文化祭の時確か男の人がえまに会い

に来てたよね？」

女子3 「そうだと思います！ (小声で) じ

ゃあ、あれが田中陽斗だったの？」

えま、困った顔。

桃香、教室に入って来てえまが囲まれ

ているのが見える。

桃香 「あのさ。誰が流したかも分からない情

報でこうやって問い詰めるのやめようよ」

と、輪に割り込む。

女子4 「ねえ、紗耶香はどう？ 一番気にな

ってるんじゃない？ この写真」

紗耶香がちょうど教室に入ってきて来る。

紗耶香「……なに？」

女子5「これ。田中陽斗の写真」

と、例の投稿を見せる。

紗耶香「ああ。あり得ないから。陽斗くんは

ね、プロのアイドルなの。今までこういう

女絡みのスキャンダルなんてなかった。な

のに今更こんなへマするわけないから。そ

れに高校生なんか釣りが合うわけないじゃ

ん。陽斗くんのタイプは年上。しようもな

いことで騒がれて本当に迷惑。拡散なんて

くだらないことしないでね。陽斗くんに迷

惑だから」

クラスが静まる。

女子3「……さすが。次元が違うわ……」

女子4「そういえばえまに会いに来てた人っ

て、女の人苦手で引きこもりなんだっけ？

ワケありませんでしょ？ 田中陽斗なわけな

いか」

女子5「ごめんね聞き出すようなことして」

えま「……うん、大丈夫……」

えま、席に座る紗耶香を見つめる。

○同・廊下（朝）

紗耶香、廊下を歩いている。

えま「紗耶香！ちよつといい？」

と、呼びかける。

紗耶香、振り返ってえまを睨む。

○同・空き教室（朝）

教室の真ん中で向かい合う二人。

紗耶香「冷たく」なに？」

えま「……さつきはありがとう。私うまく言

葉が出てこなかったから、助かった」

紗耶香「吐き捨てるように」別にえまのため

じゃないから」

えま「うん、分かっている……」

紗耶香「イラっとした顔」

紗耶香、えまの頬をパチンと叩く。

えま、放心状態。



紗耶香「ねえ、何してんの？　自分が何した

か分かってる？　あれはどう見ても陽斗く

んだった！」

えま「……！」

紗耶香「なんで陽斗くんがうちの文化祭来て

えまと一緒にいたのか、本当は気になるけ

ど。でも今はどうでもいい！　ただこの騒

ぎのせいで陽斗くんが嫌な気持ちになった

だろうなとか、今後の活動に支障きたした

らどうしようとかそれだけが心配！　陽斗

くんやユニクラのこれからに何かあったら

えまのせいだからね？　私一生恨むから！」

紗耶香、感情的に言い放って教室を出

ていく。

えま、茫然と立ち尽くす。

えま「……紗耶香の言う通りだ」

えま、しゃがみこんで膝に顔を埋める。

○ミラベル・バックヤード（夜）

勇輝、休憩室で眉をしかめてスマホを

見つめる。

綾乃「お疲れ様——」

と、入って来る。

勇輝「お疲れ様です」

綾乃「どうしたの、険しい顔して」

勇輝、綾乃に例の投稿を見せる。

綾乃「これ隣のってえま……？ 違うか」

勇輝「いや、多分そう……」

舞「こーら勇輝！ 食べ終わったら早く戻っ

て来てよ！（綾乃を見て）あ、綾乃お疲

れ！」

と、店長・舞が顔を覗かせる。

綾乃「……お疲れ様です」

舞、二人の異変に気付く。

舞「どうした？ 二人してそんな神妙な顔し

て」

勇輝、舞にも投稿を見せる。

舞「なにこれ……」

勇輝「SNSで回ってきたんですけど、結構

騒ぎになってるみたいで……」

綾乃「盗撮写真載せたり、勝手に情報書き込

んだり。ネットリテラシー低すぎ！」

勇輝「心配そうに」アイツ大丈夫かな……」

綾乃、勇輝の横顔をチラッと見る。

舞「……私たちはいつも通り接してあげよう。

それが一番」

勇輝と綾乃、頷く。

舞「準備できたら来てよー」

と、戻って行く。

勇輝・綾乃「はい」

勇輝、スマホを仕舞って立ち上がる。

綾乃「えまに連絡してあげた方がいいんじゃない

？」

勇輝「いや、今はそっとしておきます。俺ら

が知ってるって方がアイツ気遣いそうだし」

綾乃「そっか……」

勇輝「でも分かんない。俺よくえまに『女心

分かってない』って言われるし。先輩だっ

たらどっちがいいですか？」

綾乃「私？ 私は別に……アンタがそう思う

ならそれが正解だよ。えまのこと一番よく分かってるだろうし」

綾乃、エプロンを付けて先に出る。  
勇輝、綾乃の背中を見て首を傾げる。

○同・店内（夜）

陽斗が店に入って来る。

綾乃「いらっしやいませ。お伺いします」

陽斗「えっと……アイスコーヒー一つ」

綾乃「かしこまりました。四百円になります」

陽斗、支払いをする。

× × ×

陽斗、ドリンクを待ちながらえまを探  
す。

勇輝、ドリンクを作りながら陽斗をチ  
ラッと見る。

勇輝「えまならいいですよ」

陽斗「えっ」

と、凶星で驚く。

勇輝「はい、アイスコーヒーです」

と、カップを渡す。

陽斗、受け取りながら、

陽斗「……えまって次いつシフト入ってます

か？」

勇輝「お客様、たまに来られる方ですよね？

えまの知り合いなら、連絡すればいいんじゃない

やないですか？」

勇輝、陽斗を怪しむ目でじっと見つ

める。

陽斗、顔を隠すように帽子を深く被る。

陽斗「……ですよ。ありがとうございます。ごきます。」

と、出口に向かう。

勇輝「どっかで見えた顔なんだよな……」

と、首を傾げる。

○事務所・ダンススタジオ（夜）

鏡張りのスタジオ。

ユニクラウン、音楽に合わせて真剣に

ダンス練習。

悠真「なんとか全員でスケジュール揃って良

かったね」

柗也「合わせなしで本番もあり得たよな」

翼「ふざけて」陽斗お前が忙しすぎなんだ

よ！」

陽斗、暗い表情。

凜太郎「もうはるピー！俺がいいよって言

うまでネット見るの禁止って言ったじゃ

ん！」

陽斗「見てないよ、見てない……」

翼「大丈夫だよ。社長、いや事務所の総力を

結集させて元の投稿は消されてるし、何も

問題にはなっていないじゃん！あとはその

うちみんな興味なくなるのを待つ！」

陽斗「……でも、あの写真は永遠にネット上

に残る。えまを晒し続けることになる……」

メンバー「……」

陽斗「みんなにも、迷惑かけて本当にごめ

ん！」

と、土下座する。

凜太郎「やめてってば！」

悠真「そうだよ。はるピーが謝ることじゃないんだから」

柊也、しゃがんで陽斗の肩をトントンする。

柊也「せっかくもらったチャンスなんだからさ。あんなくだらない話題消し飛ばすくらい、カウントダウンでぶちかまそうぜ！」

翼「おー！」

陽斗「……うん」

○高校・食堂

お弁当袋を持ったえまと、カレーのトレイを持った桃香が席に座る。近くに座る男女がえまを見てこそこそ話す。

後輩女子1「あの先輩だよ」

後輩女子2「ねえ、話しかけてきて」

後輩男子1「なんて言うんだよ」

後輩女子1「えく？　なんだろ」

後輩男子2「田中陽斗と俺どっちがカッコい

いですか？』って」

男女、キャハキャハ盛り上がる。

えま、気付かないフリ。

桃香、男女をキリっと睨む。

男女、静かになる。

えま、桃香を見て微笑む。

えま「ありがと、桃香」

えま、袋からゼリ―飲料を取り出す。

桃香「えまそれだけじゃ足りなくない!? カ

レ―あげるよ！」

えま「ありがと：：あんまりお腹空かなくて

（気丈に）最近食べ過ぎてたからちよつと

ダイエツトも兼ねてね！」

桃香、辛そうにえまを見る。

桃香「そうだ！ 今日のカウンtdown、ユ

ニクラ出るよね！ 新曲宇宙初解禁なんで

しょ？ 宇宙初解禁ってすごいね」

えま「：：そうなんだ」

桃香「うそ、知らなかったの？」

えま「うん：：何も見てなくて」



桃香「そっか：：じゃあ私が代わりにユニク  
ラの情報をえまに伝えるよ！」

えま「桃香、アイドルは全然なの？」

桃香「うん、全く知らない！でもね、オタク  
クって、全界限共通だから。完璧に情報集  
めるから任せて！」

えま「フッフ」

えま、笑いながら切なそうな顔。

### ○テレビ局・楽屋（夜）

陽斗、鏡の前に座ってスマホを見る。  
えまとのメッセージ画面。へえま…迷  
惑かけて本当にごめんなさいへ陽  
斗…電話で話せる？へ以降既読がつい  
ていない。

陽斗「：：」

楽屋の外で声がして、荒々しくドアが  
開く。

直哉「おい大和待てよ。落ち着けて！」  
ルートエー・直哉の制止を振り切って

大和が陽斗の目の前に来る。

陽斗、立ち上がる。

大和、陽斗の衣装の胸元を引っ張って、

大和「俺言ったよな!? 距離感気をつけろっ

て! お前自分が何したか分かってんのか

!? メンバーだけじゃない、一般の、それ

も未成年の女の子を巻き込んだんだぞ!」

柊也と悠真が大和を離そうとする。

柊也「そんなの陽斗が一番分かってるから!」

悠真「大和落ち着けて!」

ルートエーのメンバーも止めに入る。

遼「大和! 落ち着けて!」

大和、陽斗を離さない。

陽斗も抵抗しない。

後藤「お前ら何やってんだよ!」

後藤が入って来る。

大和、ようやく陽斗を離す。

後藤「勘弁してくれ、本場前だぞ」

大和「: : すいません」

と、楽屋を出ていく。

夏樹「大和っ！」

遼と夏樹、大和を追う。

直哉「はるピーもみんなも、ごめんな」

直哉も三人を追って楽屋を出る。

凜太郎「はるピー大丈夫？」

陽斗「：：うん。ごめん、ちょっと頭冷やし

てくる」

悠真「はるピー！」

と、追いかけてようやく止めるが柊也に止め

られる。

柊也「首を横に振る」

悠真「：：」

○同・ルートエーの楽屋（夜）

大和、壁にもたれて座る。

夏樹「大和の気持ちも分かるけどさ。さっき

のは暴走しすぎ」

遼「でも青春ドラマみたいで俺ちょっと興奮

した」

夏樹「（笑って）おい！」

直哉「あとでちゃんとはるピーに謝っとけよ」

大和、不満そうに頷く。

○同・モニター室（夜）

宮本と塚越が画面でユニクラウンのパ  
フォーマンスを見る。

宮本「塚ちゃん本当にありがとね」

塚越「やめてくださいよ。そんな素直にお礼  
言われるの気持ち悪いです」

宮本「ハハッ。俺にそんなズケズケ言ってく  
んのは塚ちゃんくらいだよ」

塚越「俺にこんな無理言ってくんのも宮本さ  
んくらいですよ」

宮本「だろうな」

塚越「まあでも、ユニクラの人気は確かです  
し、こうしてうちで独占させてもらえるの  
はありがたい限りですけど。もう少し俺の  
ことも考えてくれればなお嬉しいですよ」

宮本「久しぶりに行っちゃう？」

塚越「魚でお願いします。そろそろ肉きつく

なってきたんで」

宮本「お前もう肉ダメなの？ 早くない？」

塚越「（笑って）余計なお世話ですよ」

○高橋家・リビング（夜）

桃香、真剣な顔で音楽番組を見る。

桃香の母「桃が三次元の番組見るなんて珍し

い。誰か出てるの？」

桃香「ちょっと友達の推しがね！」

画面、ユニクラウンが映る。

桃香、拍手する。

○宮本家・ダイニング（夜）

美香、カーリリを抱いて音楽番組を見ている。

美香「えま！ 陽斗くんたち歌うよ！」

えま、テレビ画面をチラッと見る。

えま「ああ……うん……」

えま、ダイニングを出て行く。

美香、心配そうに見つめる。

○同・えまの部屋（夜）

暗い部屋の中、ベッドの上で体育座りをして膝に顔を埋めるえま。

○テレビ局・廊下（夜）

陽斗、楽屋に向かって歩いていく。

大和の声「陽斗！」

陽斗、振り返る。

大和「さっきはごめん。本番前に」

陽斗「いや。本当に大和の言う通りだから」

：

大和「いや。お前自身が一番責任感じてんのが分かったのに言い過ぎた。えまちゃんと連絡とってる？」

陽斗「一回返信あったけど、その後は何も」

：

大和「そっか」

スタッフ、スタッフ、陽斗を呼びに来る。

スタッフ「すみません陽斗さん。そろそろ」

：

陽斗「あ、はい！（大和に）じゃあまた」

大和、手を挙げて陽斗を見送る。

○同・ユニクラウンの楽屋（夜）

宮本「お疲れさん！　急で悪かったな！」

柗也「いえ。ありがとうございます！」

宮本「（陽斗を見て）もうだいたいぶ落ち着いてきているから、大丈夫だぞ」

陽斗「……本当にご迷惑をおかけしてます」

と、深々と頭を下げる。

宮本「やめろやめろ！　照れるだろ！」

陽斗「あの社長。一つお願いが」

宮本「ん？」

○宮本家・玄関（夜）

宮本、美香、陽斗、立ち話。

美香「ごめんね……えまもう寝ちゃって」

陽斗「（察する）そうですね……こんな夜遅くにすみませんでした」

美香「ううん。陽斗くんちゃんにご飯たべて

る？」

陽斗、頷いて、

陽斗「社長、美香さん。この度はえまさんを巻き込んでしまい本当に申し訳ありませんでした」

と、頭を下げる。

宮本「陽斗！」

美香「陽斗くんやめて？あの時私たちが陽斗くんを一人にして行っちゃったから……ごめんなさい」

と、陽斗を起こす。

美香「えまもね、普通に学校行って元気だから大丈夫。責任なんて感じなくていいからね」

陽斗「えまさんにも、本当にごめんなさいと伝えてください」

○同・えまの部屋（夜）

えま、ベッドに入っているが、眠らずにボーっとしている。



○同・玄関（朝）

えま、靴を履いて、

えま「……行ってきます」

美香の声「はい！行ってらっしゃい！」

えま、家を出る。

○高校・教室（朝）

谷口、教卓に立って出席確認。

谷口「誰か宮本から連絡きてるか？」

生徒、ザワザワする。

谷口「分かった。先生から保護者に連絡して

おく」

桃香、えまにメッセージを送る。

へ桃香…大丈夫？今どこ？

男子「女子が色々言ったからじゃん？」

女子3・4・5、気まずそうにする。

桃香「そうやって蒸し返さないで！」

と、男子に怒る。

紗耶香、反省の顔。

○事務所・社長室（朝）

宮本、椅子に座って通話。

宮本「落ち着いて。とりあえず美香はバイト先と、お義父さんたちの所に行っていないか確認して。あとは俺がなんとかするから」

美香の声「何か事件に巻き込まれてたらどうしよう……」

宮本「大丈夫。俺が必ず見つけるから。うん、うん。何か分かったらすぐ連絡する。じゃあね」

宮本、電話を切る。

秘書「えまさんに何かあったんですか？」

宮本「えまが朝家を出てから行方不明らしい」

秘書「それは緊急事態ですね。家からの足取りを追わせませす」

宮本「頼む。ずらせそうな予定はリスケして」  
秘書「分かりました」

○ミラベル・店内

扉が開いて美香が入って来る。

舞 「いらっしやいませ」

美香 「すみません。宮本えまの母です」

舞 「ああ、えまさんの！店長の坂本です。

えまさんにはいつもお世話になってます」

美香 「いえ、こちらこそ：：あの、今日ここ

にえまが来ませんでしたか？」

舞 「いえ。シフトも入ってないですし：：何

かあったんですか？」

美香 「実は朝家を出たきり連絡がつかなくて

：：」

舞 「（驚いて）もし来たらずぐに連絡します

ね！」

美香 「お願いします」

と、頭を下げて店を出る。

○スカイツリー付近・歩道

えまが歩く姿。

建物の間からスカイツリーが見えてい  
る。

○事務所・スペース

ユニクラウン、椅子に座って動画の撮

影中。

凜太郎「チャンネル登録もよろしくね！」

翼「ばいびー！」

メンバー、カメラに向かって手を振る。

スタッフ「はい、OKです！」

悠真、大きく伸びをする。

悠真「さすがに三本撮りはキツイね」

翼「ねえなんか出前とらね？ スタッフさん

も良かったら！」

一部スタッフは喜び、一部スタッフは

バタバタしている。

柊也「今日いつもより忙しそうだな」

悠真「何かあったんですか？」

と、スタッフに聞く。

スタッフ「実は社長の娘さんと連絡がつか

いらしくて」

スタッフ、こっそり耳打ちする。

陽斗「!？」

凜太郎「えまちゃんが!？」

悠真「はるピーのところに連絡は？」

陽斗「(スマホを見て)いや、何も……」

翼「スマホの電源切ってるのか」

柊也「心配だな……」

陽斗、スマホに打ち込み始める。

凜太郎「はるピーどうしたの？」

メンバー、陽斗の周りに集まる。

凜太郎「(画面を見て)あー！」

悠真「なるほど！」

柊也「いいじゃん」

翼「俺らが添削してやるよ」

陽斗、真剣な顔でスマホに文字を打つ。

× × ×

陽斗「みんなありがとう！」

と、後ろのメンバーを見る。

悠真「はるピーの思いはちゃんとみんなに届

くよ」

陽斗、頷く。

翼「あとはえまちゃんだな。高校生が行きそ

うな所ってどこだ？」

凜太郎「新宿、渋谷、原宿とか？」

柊也「陽斗は心当たりない？ えまちゃんが

よく行く場所とか、思い出の場所とか」

陽斗「：：もしかしたらだけど：：！」

陽斗、何か思いついた顔で走り出す。

翼「おい、陽斗！」

○ 隅田川テラス

えま、柵に寄りかかってスマホを出す。

電源が切れている。

えま「あれ、電源切れてた」

えま、電源をつけるとメッセージや不在着信が表示。

ブログ更新のメール通知がくる。

えま、ブログを開く。

「いつも応援してくれるファンのみんなへ」というタイトル。

えま、緊張した表情で読む。

陽斗N「この度はお騒がせしてすみません。

しかし、ファンのみなさんに顔向けできないような事実はなく、それは今後とも変わりません。このように後追いで話をしていく自分が不甲斐なく、情けない気持ちでいっぱいですが、これから僕のことには僕の口から、僕の言葉でみなさんに伝えていくと約束します。だから、どうかこの先も僕を、そしてユニクラウンを信じて一緒に歩いてもらえると思います。P・S・今隣にメンバ―もいます。みんな、いつもありがとうと「う！」

えま「(鼻声) ああ……」

えま、涙が零れないように空を見上げる。

○ 隅田川沿い・道路

停車したタクシーから陽斗が出てくる。

陽斗「ありがとうございます！」

陽斗、走りながらえまを探す。

× × ×

陽斗「！」

柵に寄りかかっているえまの後ろ姿を見  
つける。

○ 隅田川テラス

えま、大きく息を吸って、

えま「（咳くように）好き……大好き……」

陽斗、後ろから近づく。

陽斗「……見つけた」

陽斗、えまの頭にポンと手を置いて隣  
に来る。

えま「（ビクツとして）なんで……？」

陽斗「なんとなく。ここに居る気がした」

えま「……今の、聞こえました？」

陽斗「（とぼける）何か言っていたの？」

えま「（ホッとする）聞こえてないならいいん  
です」

陽斗「（顔を覗き込んで）好き、大好きって、

誰のこと？」

えま「聞こえてるじゃないですか！」



陽斗「（笑って）ごめん、聞こえた」

えま「（早口で）ちよつと言ってみただけとい  
うか：：そう、川！ 隅田川っていいなく  
好きだなくって」

と、言い訳。

陽斗「俺のことじゃなかったんだ。残念」

えま「いやっ：：えっと：：？」

と、目が泳ぐ。

陽斗「（苦笑して）その反応は凹むな」

えま「からかわないください：：陽斗くん  
には年上の可愛い女優さんがいるじゃない  
ですか」

陽斗「待って。彼女とはマジでなんもないっ  
て！ えまこそいいの？ 今の俺は、ただ  
の田中陽斗だよ？」

えま「そのことは忘れてください！ あの時  
は、陽斗くんのうちでも気を張らせないよ  
うにと思って言ったんです：：でも、今考  
えるとすごく感じ悪くて失礼でしたよね：  
：ごめんなさい」

陽斗「：：分かってる。えまはそうやって人のために考えられる子だって。だから俺、えまのこと：：」

えま「！」

えまと陽斗、見つめ合い、徐々に顔が近づく。

二人の唇が重なりそうになった時。

翼の声「はい、カットおー！」

陽斗とえま、驚いて後ろを向く。

撮影クルーに変装した柊也、翼、悠真、

凛太郎が立っている。

陽斗「なんでここに：：？　ていうかその恰

好：：」

悠真「はるピーが事務所飛び出して行ったか

らさ」

柊也「万が一のこともあるし、俺たちもいた方がカモフラージュになるかなと思って。

ごめん、尾行させてもらった」

凛太郎「でもただついていくだけじゃつまらないし、いっそのこと撮影を装って目立っ

た方がいいんじゃないかと思って、事務所の機材持ってきちゃった！」

凜太郎、えまと陽斗にカメラを向ける。

えま「……まさか、本当にカメラ回してないですよ？」

悠真「（楽しそうに）いくら俺達でもさ？」

凜太郎「（楽しそうに）さすがにね」

翼「（楽しそうに）そんな非常識じゃないよ。

どう？ 柊也？」

柊也「……（楽しそうに）俺は止めたよ？」

陽斗、頭を抱える。

凜太郎「バッチリ撮らせていただいています！」

翼・悠真「いただきます！」

えま、両手で顔を押しさえながら、

翼「（ニヤニヤしながら）ところでお二人さん、キスはしとかなくて大丈夫？」

柊也「コラ、煽んなって！」

と、翼を叩く。

悠真「マジヤバイ」

凜太郎「（笑いながら）翼くんが邪魔したんじ

「やん」

陽斗「見せもんじゃないから！」

陽斗、恥ずかしそうに四人の背中を押して歩かせる。

えま、五人の後ろ姿を見て微笑みながら歩き出す。

前の方で陽斗がしゃがみ込む。

えま、陽斗に駆け寄ってしゃがむ。

えま「陽斗くん？大丈夫ですか？」

と、陽斗を覗き込む。

陽斗「真剣なトーンで」えま」

えま「真剣に」はい」

陽斗「俺を見つけてくれて、俺と出会ってくれて、ありがとう」

えま、目を見開く。

えま「優しく」当然です。だって陽斗くんは、私のイチバンボシですから」

陽斗、えまの髪を愛おしそうに撫でて顔を近づける。

額をくっつけて止まる。

至近距離で見つめ合う二人。

陽斗「今はここまで、な」

えま、喜びを囁みしめながら頷き、幸

せそうに笑い合う。

翼「おい、イチヤイチャしてるその二人

ー置いてくぞー」

翼、メンバ―と前を見て歩きながら

陽斗たちに向かって話しかける。

陽斗、立ち上がる。

陽斗「行こ！」

と、えまに手を差し出す。

えま、陽斗の手を握って陽斗と走って

行く。

○ミラベル・店内（夜）

舞、バックヤードから顔を覗かせる。

舞「えま無事だったって！」

綾乃「良かったあ！」

勇輝「（安心して）ほんと、お騒がせなやつ」

綾乃「良かったね。えまに連絡してあげな」

勇輝、綾乃を見つめる。

勇輝「あの……俺先輩に何かしちやいました

た？ この間から妙に距離感じる」

綾乃「……だって、私がアンタと仲良くして

たらえまが嫌かなって」

勇輝「なぜにえま？」

綾乃「だって、二人付き合ってるんでしょ？

二人がデートしてるの見たよ!？」

勇輝「デート……？ ……ああ！ あれか！」

と、笑い出す。

綾乃「ほら！ そうでしょ！」

勇輝「あれはデートじゃないし。そっか、だ

から様子が変だったのか。理解理解」

綾乃「なに？ どういうこと？」

勇輝「あれはただ買い物に付き合っただけ。

大体アイツ、好きな奴いますもん」

綾乃「（食いつく）え!？ えま好きな人いるの

!？ 同じ学校の人!？」

勇輝「（首を横に振って）でも先輩も見たこと

ある人。俺もあるし」

綾乃「ええ、ちよつと、いいから教えてよ！」

勇輝「ちなみに俺も好きな人います」

綾乃「へえー」

勇輝「へえーって。俺のこと興味なさすぎでしょ。普通に傷つくんですけれど！」

綾乃「どうせそれも教えてくれないんでし

よ？ まあ学校の子とか言われても私に分

かんないけど」

勇輝「……言ったら、ちゃんと信じてくれま

すか？」

綾乃「人の好きな人を疑うとかなないから！」

勇輝「……先輩」

綾乃「なに？」

勇輝「だから、先輩。俺の好きな人は、吉村

綾乃さんです」

綾乃「……はあ？　ちよつとからかわな……  
（自分が言ったことを思い出す）」

綾乃、口を手で覆う。顔が赤い。

勇輝「そんな反応されたら、俺期待しちゃう  
んですけれど」

見つめ合う二人。

扉が開いて客が入って来る。

勇輝「いらっしやいませ！」

勇輝、綾乃の横を通る時に、

勇輝「今日は先帰るのナシですからね」

と、耳打ちしてレジに行く。

綾乃、耳まで真っ赤になっている。

○宮本家・玄関（夜）

美香がドアを開ける。

えまとその後ろにはユニクラウン、宮

本が立っている。

美香、えまを抱きしめる。

えま、美香の首元に顔を埋める。

一同、二人を見守る。

嬉しそうに笑うえまと陽斗。

○渋谷駅・ハチ公前

ハチ公の横の桜の木が咲き始めている。

○渋谷・スクランブル交差点



大型モニターでニュースが流れている。

モニターにはS・Sエンターテインメントの声明文。

ナレーター「弊社所属田中陽斗への誹謗中傷につきまして、現在情報開示請求を進めて  
いる旨をご報告させていただきまます。この  
ような行為は誰に対しても許されるもので  
はありません。弊社は今後とも徹底的に対  
応して参ります。これからも皆様の変わら  
ぬご支援を賜りますようお願い申し上げま  
す」

○とある家・リビング（夜）

男子高校生が帰って来る。

母親、リビングに座って郵便物を見て  
いる。

母親「ねえ。これ、どういうこと？」

男子高校生「なに？」

男子高校生、母親から紙を受け取る。

「発信者情報開示に係る意見照会」と

書かれている。

男子高校生「（青ざめて）なんだよ、これ」

○とあるアパート・一室（夜）

女子大生、封筒を開けて中身を見る。

「発信者情報開示に係る意見照会」と

書かれている。

女子大生、心当たりがある顔。

SNSを開いて「陽斗くんの手握って

る隣の女マジ死んでほしい」という投

稿を削除する。

○とある一軒家・リビング（夜）

女性が子供にご飯を食べさせている。

男性「ただいま」

と、入って来る。

女性「おかえりなさい。先お風呂入る？」

男性「うん」

女性「あ、なんか郵便来てたよ」

男性、テーブルの上の封筒を手取る。

男性「なんだこれ」

と、封を切らずにゴミ箱に捨てる。

○テレビ局・楽屋（昼）

ユニクラウン、くつろいでいる。

悠真「そーいえば今日当落発表だよね？」

翼「SNS盛り上がってるよー」

と、スマホの画面をスクロールする。

陽斗、えまにメッセージを送る。

へ陽斗…どうだった？

すぐに既読がつき、魂が抜けた人のス

タンプが送られてくる。

陽斗、スマホを持って楽屋を出る。

○同・非常階段

陽斗、えまに電話。

陽斗「もしもし？今のスタンプはどっちの

意味？」

えまの声「…全落ちでした…」

陽斗「マジか…倍率えぐいな。じゃあ関係

者席でいいよね」

えまの声「でもまだ友達で結果聞いてない子  
いるから！もしかしたら当たってるかも  
しれないです！」

陽斗、もどかしそうな顔。

○幕張メッセ・関係者待合室

えま、隣に座る陽斗をチラッと見て、  
えま「陽斗くん、怒ってます…？」

陽斗「逆に怒ってないと思う？」

えま「それは…」

陽斗「俺らのライブには誘っても絶対関係者  
席には来ないのに、大和の誘いは断らない  
んだ」

えま「だって、ルトエーのファンクラブには  
入ってないから仕方ないじゃないですか！」

凛太郎「はるピーやきもち妬いてるう」

翼「嫉妬深い男はフられるぞ」

と、からかう。

陽斗「俺別におかしいこと言っていないよね！」

と、後ろの柗也と悠真に同意を求める。

悠真「（笑いながら）ノーコメントで」

柗也「（笑いながら）俺らを巻き込まないで」

陽斗、不満そうにする。

えま「そういえば！ユニクラのライブに行くことになりました！」

陽斗「（機嫌が戻って）ほんとに!？」

えま「友達が見事当ててくれました！」

陽斗「でも前にえま、オタク友達全然いない

って言うってなかった？」

えま「（嬉しそうに）それがですね……」

○横浜アリーナ・会場内

えまと桃香、ペンライトとうちわを持

ってステージを見つめる。

桃香は悠真のうちわを持っている。

桃香「ねえ、あれ紗耶香じゃない？」

桃香の指差す先に陽斗のうちわを持っ

た紗耶香の姿。

えま「ほんとだ！紗耶香！」

と、手を振る。

紗耶香、えまに気づいてクールに手を振り返す。

満足げなえま。

音楽と共に客席が暗くなり、ステージ

がライトで照らされる。

ユニクラウン、派手に登場。

観客「キャー——！」

× × ×

陽斗、トロッコに乗って歌いながらえまたちの近くにくる。

桃香、背中を向けている陽斗を指差し

ながらえまを促す。

えま、頷く。

えま「陽斗くんっ！」

と、叫ぶ。

陽斗、ゆっくり振り向いてえまと視線

が絡む。

陽斗「（口パクで）見つけた！」

と、えまを指差す。

えま、ニコツと笑ってペンライトを振る。

（了）